

高等女子教育の理念と 宗教的基礎問題

金子 日 威

目 次

1. 緒 言
2. 日本民族の伝統的女性観
3. 仏教の女性観
4. 日蓮聖人の婦人観とその特色
5. 高等女子教育の根本理念
6. 道德教育の支柱となるべき宗教々育について
7. 結 語

(1) 緒 言

一般に高校から大学へかけての女子高等教育については、教育者の立場で一応その基本方針が打ちたてられているわけであるが、それも教育実施についての実際面のことに限られ、特に宗教心の涵養とか、芸術的情操の教育とかいう特色のある問題ともなれば、必ずしも充分の留意がなされているわけではないと思われる。

教育の根本理念からいえば、如何に専門的分野の教育と雖も、単に学問的知識や実際の技術の習得だけで事が終るものではない。より根本的には人格の陶冶こそ肝要の眼目であり、教育は終始一貫してこの目標を完遂するところにあると称しても過言ではない。

しかも、宗教・芸術の如き特殊的分野に於いては、一般教育に付け加えるべき何物かがなければ、教育の成果も充分に挙げられるものではない。そのプラス・アルファとは、必ずしも技術的なものには限らないであろう。特に、その

学園が宗教的背景と無関係ではあり得ない場合教育実施に当たっての技術的方面が微妙な問題を胎むことになるだろう。

概して宗教的信条を建学の精神としている大学においても、一般に解放された学園として宗派的に個性化することには限界があるべきものだとするし、宗教々育に熱中するのあまり、学生に特殊な信仰を強要するが如きことがあってはならないと思う。宗門とは全く関係のない子女も学生の中にはいるのであるから、宗派的理念によって教育の方針が樹立されることがあったとしても、宗教信仰の形式までも露骨に取り入れることには問題があらうと思われる。そこには一般男子の教育機関と違って、問題は多岐に亘るものがあるであろう。

教育とは、人間完成を旨とする一つの過程として見なければならぬ。

只、教育方針が月並みで低次のものであれば学生もそれに相当して現実本位にならざるを得ないし、これに情操の高次の何物かが加えられればその成果もおのずから相違し、学生のスタイルも特色あるものとなるであろう。宗教的信条を建学の精神とする大学が如何なる教育理念に準則して所期の目的達成に進むべきか、明白なようではないながら、教師として実際の衝に当たって見ると、甚だ明瞭を欠いていることがある。

この論攻は、女子高等教育に関係あるものとしては聊か緊張し過ぎた嫌いがなくもないが、わが民族の歴史がどのように女子そのものを見

て来たかを顧みると共に、且つ又、日蓮宗をも含めて仏教の女性観がどのようなものであったかに触れ、現今における宗教教育の問題を再考して見たいと思った次第である。

(2) 日本民族の伝統的女性観

わが祖先に当る民族は、女子一般に対して必ずしも軽侮の念を以て見ていない。しかも或る場合には、男子よりも強力なちからを持つものとして優位の地位を附与しているところは、世界各地の宗教と大いに異ったものがあると思われる。

これを古代史の研究家は、口を揃えたように母系社会の必然性と見る如くであるが、では何故、母系を中心とした生活環境が成立したのかという根底にある問題には触れない。狩猟本位の原始社会から農業本位の生活様式へと移行しながら、太古の人々は猶且つ母系社会時代の思想観念を連綿として享け継いでいたのは何故かと考えるときに、社会環境と生活様式をその原因としか見ない科学的考察のみでは、この謎は解けないであろう。女子を優位と見る観念が古代社会にあったことは天照大神を中心とした高天原神話に、母系中心の思想の片鱗が明らかに窺われることによって否定出来ない。

日本人がフェミニストであるわけではないが神代といわれた時代の祖先は、精神的な面から女性の地位を高く評価していた。只、ここに精神的といっても、知能的という意味ではない。その優しさとか、柔らかさという如き外面からの観察によって分るところのものだけでなく、何かしら靈的に包容するところの特質をそこに見た。男性は寧ろ包まれるものに相当した。このように包容性を特長とする女性は、子孫対

する祖先とその地位を均しくしたのである。子孫は祖先によって包まれるものであり、このような相関関係が男女の間にもあるのだという認識であった。男性は働くものであり、女性は働かしめるものという関係が両者の間にあるものと見て、しかもこれの子孫と祖先との関係と同一視した。但し、これは飽くまで精神面でのことであり、社会的地位に関する事柄ではない。

また、個人の家庭を見てよく考えて見ても、男性は社会的地位を握って主導権を持つが、それは外形から見た場合のことで、家庭の内部にあっては、主人よりも主婦の方が家庭を動かしている。外形からいうのでなしに、精神的な繋りを見てそういえるのである。家庭の主導権は寧ろ女性の側にあるのだともいえよう。山の神という最も位の高い主導権の逆鱗に触れたら、家庭内の平和は木ッ葉微塵である。靈的に見た女性の地位は、この意味で甚だ微妙なものがあるといえるだろう。

尚、男尊女卑の傾向は、かなり古い時代から世界の各地に見られたもので、洋の東西においても、何等区別されるところを見ない程、一般的なものであったが、叙上の考察から特に強調したい日本思想の特色をいえば、一面において女尊男卑の傾向も見られたということである。しかも、それが時代の区分によって消長しているのではなく、同時同処に存在したという事実に着目しなければならない。そして又、同時同処にあり得たという相反的な二つの傾向は、その一つが社会的表面からのものであったのに対し今一つは精神的内面からのものであったことを対照した場合、わが民族の祖先が極めて微妙なる観点から男女両性の本質を捉え得ていたことに、一驚せざるを得ないのである。

法律的な平等論を一般的に両性の上に適用す

るが如き謬れるデモクラシー思想は、日本の古典を忠実に見直すことによって匡正されねばならぬものであろう。

(3) 仏教の女性観

原始仏教の教団では、女性一般に対して高い地位を与えていないことは周知の通りである。比丘僧の二百五十戒に対して、比丘尼の五百戒が計上されていたのは、過当ではあるまいかとの世評もしばしばあったが、この時代のインドでは男尊女卑が通念であったし、また初期の教団を厳正に維持する必要から課せられた戒律ではなかったかと弁護する向もある。然りとすれば仏道修行に何かと障碍が多く、比丘僧の墮落にも無関係ではないと見られた比丘尼を強く規制したのは、男僧側の便宜主義によったものと見られるわけで、修行の妨害となる意味から女性の入団を容易に許さなかったり、また入団しても男僧以上の戒律を以て縛した事情も、よく分るような気がする。

察知するに、初期の教団には教団特有の御都合主義から比丘尼を敬遠した事情があったであろうことは想像に難くないが、インド人一般に女性蔑視の思想が伝統的にあったことも疑いを容れない。そして、注意すべきは、インド人の思惟形式は日本人のそれとも違って、とかく一方的になり易いという傾向があったことである。『増一阿含経』に、穢悪・両舌・嫉妬・瞋恚・無反復などという五悪を列挙して、女人の不徳を痛烈に批判しているところがある。同経の五力・五欲なども似たようなものであり、大小乗の諸經典を通じて女性蔑視の表現は尠くない。大乘經典では、『華嚴経』に

「女人は地獄の使にして、能く仏種を断ぜ

ん。外面は菩薩の如くなるも、内心は夜叉の如し」

という有名な句がしばしば引用せられる。また、女人の心は河川の如くに詭曲であるという句は、日蓮聖人も引証されている。或は世親の『往生論』に、極楽世界は仏のみが在ます所で二乗や根歛の衆生、乃至、女人の如きはないと述べているところは、浄土教の主旨からも問題となったところである。

『法華経』の「提婆品」に見える女人の五障思想は、本経の独占すべきものでなく他の大乘經典などにも見えているが、只その違うところは、五障そのものが本経の思想ではなくて、経の聴聞者である舍利弗が曾ての領解を述べて、女人には五障があるとされているので成仏は出来ないであろうというのに対して、本経の立場でこれが否定されていることである。即ち、

「女身は垢穢にして、是れ法器に非ず。云何ぞ、能く無上菩提を得ん。仏道は懸昞り。無量劫を経て、勤苦して行を積み、具さに諸度を修して、然る後に乃ち成ず」

と述べて、女性の身としては遂に、

- ①梵天王 ②帝釈天 ③魔王 ④転輪聖王
⑤仏身

にはなれないだろうと、舍利弗が問い詰めるのであるが、婆竭羅竜王の八才になる竜女が、この問いに答える代りに、「汝が神力を以て、我が成仏を觀よ」といって、須臾の間に忽然として女身を変じ、男子となって成仏した。

この変成男子という思想は『無量寿経』にも出ていて、一般的なものであったかも知れないが、畜身を改めずに成仏したとはいえ、女身を男子に改転せしめての成仏であるから、謂わば条件付きの即身成仏思想で、その底流をなしているものは明らかに男尊女卑の思想である。

『法華經』も女性蔑視の觀念を十分に精算し切っていないことが諒解される。

しかし、法華經教学では巧みにこれを会通して、竜女は女身のままで成仏しているのであるが、しかも猶、變成男子の姿態を取ったのは、その成仏を他人にも分らせるため、一般の通念に従ってそうしたまでのことだと説明する。中国では『法華文句』(天台智顛)に註釈を加えた妙楽大師が、早くもこの見解を提示しているが聊か解釈に墮した如き感がせぬでもない。日蓮聖人は“一念三千”という理論から女人成仏が必至であるということを、『開目鈔』で左の如く述べている。

「法華以前の諸小乗經には女人成仏を許さず。諸大乘經には成仏・往生を許すようなれども、或は改轉の成仏、一念三千の成仏に非ざれば、有名無実の成仏往生なり。」

日蓮教学の根柢には“事の一念三千”という思想があり、現実世界の事象を十界互具の縁起思想に基づいて開顯するのであるが、聖人の考え方では男女の区別を選ばず、そのままの姿で成仏が出来るのだという窮極的理想論にまで到達されていた。勿論、この解釈は妙楽大師の系譜を引くもので、恣意的な独創では決してない。しかし、このような発展的解釈は護教的立場からのもので、為めにする解釈と見られなくもないが、言外の意を論理的に推究すれば自づと到達する結論であり、中国の論師を媒介とせずとも、必然的に導き出された主張であつたらう。しかも、かかる思想の淵底には、後に本覚思想まで生み出した独自の日本の性格すら窺えることに於いて、猶更の感を深くする。

今、五障思想を以て仏教を代表せしめ、その行きつく解釈を経過的に見たのであるが、まだこのほかに、女人を罪障の固りと見るような思

想がないわけではない。しかし、仏教の思想を始めインド人の思考がその段階に終っていたのでは意味のないことで、日蓮聖人は一念三千の哲学から遂にその五障思想までを否定し、すぐれた日本の感覺を以て、女人成仏の思想を、その行きつくところまで發展せしめたのであつた。

(4) 日蓮聖人の婦人觀とその特色

しかしながら、聖人の女人成仏思想にも、条件がないわけではない。『諸法実相鈔』に

「末法に妙法蓮華經を弘めん者は、男女を嫌うべからず、皆、地涌の菩薩の出現に非ずんば、唱えがたき題目なり」

とあるように、仏となれるのは『法華經』(特にその題目)の信行者に限られたのであつた。

要するに、本化の大教を信じ且つ行ずるという立場からいえば、男女はまさしく平等の利益に預るべきもので、女性が法器でないなどという根柢はどこにもないのだという主張を含んでいるところが重大である。

だが、『法華經』の前に男女が同格であるとはいっても、信仰を媒介としてのみ然かいたることで、無条件の悪平等思想を述べているわけではない。聖人も亦、日本在来の伝統思想を引き継いで、男女の地位をそれぞれ特色ずけて相補的なものに見立てている。

「女人は水の如し、¹²²₄₉器物に従う」(棧敷女房御返事)

と称し、更らに一歩進めては、

「女人と成ることは、物に随つて物を随うる身なり」(兄弟鈔)

とも述べて、女性は一般に男の従属下にはあるが、結局は男を従属せしめるものだと説明しているところは、日本の思惟の論法と軌を一に

するものである。

日蓮聖人の婦人観は、民族の伝統的思想に立脚して、極めて端的に叙述される。即ち、女性が家庭に於いてどのように振舞うのが適切であるかということ、個々の女性に当てられた消息文の中で具体的に述べておられる。曰く、

「矢の走るは、弓のちから、雲の往くことは、竜のちから、男の仕業は、女のちからなり。今、富木殿のこれへ御渡りあること、尼御前の御ちからなり。煙を見れば火を見る、雨を見れば竜を見る、夫を見れば妻を見る。今、富木殿に見参仕つれば、尼御前を見奉ると覚う。」(富木尼御書)

これは建治二年の春三月、富木胤継が下総国から身延へ聖人を訪ねたことがあり、その折、金子一貫文に酒一筒を添えて供養せられたことについて、その行届いた供養はすべて女房殿の心掛けによるところと賞讃し、躬らその札状を認め給うたものである。

この御文章に、弓と矢とを妻と夫に擬らえているのは、注目に値するところであろう。男の為す仕事は女の眼に見えない力によるのだという摂理が、この一文に簡潔な教訓として盛られている。聖人は法華経信仰に託して、日本民族の伝統的思惟を活用せられたのだとも見られる。

「女人は男を財とし、男は女人を命とす」
(上野殿御返事)

といわれたのも、極めて簡明直截の表現であるが、聖人は常に夫婦は一体であるべきだという思想を堅持せられ、夫が盗人ならば妻もまた盗人たるべきだと、徹底的に夫婦道のあり方を述べているところがある。

「女人は譬えば藤のごとし。男は松のごとし。須叟も離れぬれば、立ち上ることなし」
(四条金吾殿女房御返事)

聖人の教訓は、夫婦一体という観念に発し

て、妻はどこまでも夫に随うべきものとしながら、それが却って夫を妻に従わせる理想道であるということを高調する如くであった。盗賊の妻は夫を誡めて正道に戻らせねばならぬ筈だと思われるのに、聖人は夫と同じ盗賊の道を選ばせようとする。夫婦はそこまで徹底して一心一体にならなければいけないと見ているのである。女房への心掛けは、すべてこの観点から教示されている。

建治三年三月二日、池上宗長公の夫人へ遺わされた消息文にも、富木書と同様の訓えが述べられている。曰く、

「此度、この尼御前、大事の御馬に乗せさせ給いて候由、承わり候。法に過ぎて候御志かな。これは、殿はさる事にて、女房の計らいか」(兵衛志殿女房御書)

或る女人が身延へ参詣された折、池上家の配慮によって乗馬の便宜を与えられたが、そこまで気付いたのは恐らく女房殿の心遣いであろうとて、聖人はその行為を嘉賞なされて、この一書を認められた。この書には続いて、釈迦仏の本生譚が述べられているが、夫婦の問題に関係があるので要点を摘記すると――

昔、儒童菩薩は、五茎の蓮華を錢五百を以て買い取り、定光菩薩を七日七夜に亘って、供養し奉ったという。また瞿夷と名ずくる女人があつて、二茎の蓮華を以て菩薩に供養していうには、凡夫にてある間は生々世々に夫婦となるべし、もし仏とならん時は同時に仏となるべしと。この誓いの如く、九十一劫の間、夫婦となったが、その儒童菩薩とは誰であろう、今の釈迦仏まさしくこれにして、またそのときの瞿夷とは、その耶輸多羅夫人に他ならないというのである。

そして又、恁達太子が檀特山に入り給うたと

きには、帝釈天が金泥駒となり、摩騰迦・竺法蘭が経を漢土に伝えたときには、十羅刹が化して白馬となった故事もあるので、今、女房殿が用意したこの馬も亦、法華経のためなれば、百二十年も永生きをされて後、靈山浄土へ乗り給うべき御馬であると結ばれているが、僅かの志をかほどまでに賞めそやされて、池上夫人もいたく感激されたことであつたらう。

聖人が家庭の中に於いての主婦の地位が如何にあるべきかということについて、明確な思想を把持されていたことが、如上の御書によつても窺い知られるが、今一つ重要なことは、聖人が世の母親というものを、どう見ておられたかということである。その代表的なものとして、『刑部左衛門尉女房御返事』を挙げることが出来る。

「父母の御恩は、今、初めて事あらたに申すべきには候わねども、母の御恩のこと、殊に心肝に染みて貴く覚え候」

「飛鳥の子を養い、地に走る獣の子に責められ候事、目も当てられず、魂も消えぬべく覚え候。それにつきても、母の御恩忘れがたし」

「しかるを、親は十人の子をば養えども子は一人の母を養うことなし。温かなる夫をば懐きて臥せども、こごえたる母の足を温むる女房はなし」

「説い又、今生には父母に孝養を致すようなれども、後生の行方まで問う人はなし。……如何に聞かまほしくましますらん」

「夫れ外典の孝経には、唯、今生の孝のみを訓えて、後生の行方を知らず、身の病を癒して、心の歎きを止めざるが如し。……父母に御孝養の意あらん人々は、法華経を贈り給うべし。教主釈尊の父母の御孝養に

は、法華経を贈り給いて候」

同書の断片を長々と引用したのは、聖人の母性観が最もよく表現されていると思ったからに他ならない。右に引証した同書の間には、子を胎みてのちの母の苦しみから、生み落してからの苦勞を克明に述べ、三ヵ年間に母の乳を呑むこと一百八十斛三升五合なりとまでいわれている。趣旨まことに適切、しかも読む者の肺肝に切々と訴えて来る活力に満ちた大文章である。尚、その末尾に、

「日蓮が母、存生しておわせしに、仰せ候いし事も、余りにそむき参らせて候いしかば、今遅れ参らせて候が、あながちに悔しく覚えて候……」

といわれているように、誰でも幼少の頃には母を苦しめた思い出が必ずあるものだが、斯かる折にこそ聖人は、「一代聖教を^{かんが}検えて母の孝養を仕らんと存じ候間」、法華経を以て、今は亡き母の菩提をひたすら弔わんとせられるのであつた。

「悲母の恩を報ぜんがために、此の経の題目を一切の女人に唱えさせんと願す」

(千日尼御前御返事)

といわれたのも、同様の意趣を述べられたものである。

聖人こそ悲母孝養の第一人者であり、また聖人ほど母の恩を深く身の内に感得した聖者も稀れであつたらうと思われる。

(5) 高等女子教育の根本理念

女子教育も、高校を経て短大もしくは大学課程ともなれば、卒業後、本人が直ちに家庭の人となるかどうかは兎も角、修得した教養が直ぐに実生活へ結びつかねばならぬ必要を感じるに

違くない。高等教育で諸種の技術面が専門的に採り挙げられる所以であろう。この意味から、高校以上特に大学課程の教育というものは、技術教育から進んで職業教育の傾向をかなり強く帯びることも、当然の帰結といわなければならない。

西欧の学問的態度には知識偏重の傾向があるという非難も、現代教育に当る者としては甘受せねばならぬ。知識に人格が伴わぬことは今日の通弊であろう。例えば、考え方が抽象的に現実から浮き上り、そのままが直ちに実用化されないのは悲劇だ。机上プランが徒らに先行し、具体性が欠除されて来ると、算定した通りの結論も出て来ない。東洋の人々は日本人に限らず知識は実生活の体験から帰納せられ、容易に現実から遊離することはなかった。対象の中に主体が埋没し、認識は常に生活と共にあったのである。真理を肌合いで感じ取る態度は、抽象的に思惟を行使する態度とは逆のものである。学科の成績がよくない子供は劣等児として扱われるが、しかしそれは生活から離れて思考が出来ないという意味で、抽象的思惟が下手であるというだけである。直に頭脳が良くないのとは意味が違う筈のもので、こんな簡単な事柄でさえ兎角、謬られているようである。

学校での秀才は頭脳が優秀だとして尊ばれるが、実社会へ出たの能力を見るとそれ程でない場合が多い。生活を通して物を考え且つ行なうという能力こそ重視されるべきで、社会へ出たからの成績が学生時代のそれと大いに相違するという事実は、学校での採点が真の優劣を判定する基準にならないということの意味する。この注意すべき事態は、女子よりも男子の方に却って顕著なものがあるかも知れない。比較して言えば、女性は寧ろ現実的であり、如何に理想

家肌の性格でも、智識が実生活を遊離して先走るといふ傾向は、世の男性ほどでないかも知れぬのである。この辺は女性の特質と見られるべきものだろう。教育に当ってはよくこの特長を生かし、飽くまで実際の体験を豊富に築き上げて、自信を以て物を処理する強い性格を取得させたいものである。

しかし、女性の欠点ともいふべきものは、独自の思想を容易に持とうと努力しないことである。他人の考えを以て自分の考えとし、自身だけの思想を確立し得ない。これは女性に男性依存の本能があるからだともいえる。しかし、そのために両性の調和が取れて家庭生活が円滑にゆくという一面があるかも知れぬことを考えると、これは一概に短所と見るわけにはゆかないかも知れない。夫が盗人であれば妻も盗人であれといった日蓮聖人の訓えからいうと、女性のこの傾向は生かし方によって長所となるところのものであろうか。但し、好き嫌いの感情を唯一の尺度として、考えることをせずに感じ取るという傾向は女性特有のものであり、社会的智識を吸収して公平な立場で物をいう段になるとこれでは最早いけない。また覚えた智識や法則を公式のように振り廻して応用がきかないというのも困る。情実的には融通無礙でも、知能的には不円融そのものというのも頂けない。しかし、このような問題は、教授する側で工夫するよりも、本人の心掛け次第でどうにでもなることであろう。

戦後は、法律上の男女同権思想を履き違えて靴下と対抗するほど強くなった女性もいるそうだが、嬪天下といわれるアメリカでさえも、女性優先は婦人をいたわる意味から来ていることで、却って女性を庇護する思想だと分って見れば、杓子定規の悪平等思想を、両性の上にもまで

及ぼすべきではない。米国人でも、実際の家庭生活は明らかに夫唱婦随であって、可怪しなテレビ演劇から想像するようなものではない如くである。

日蓮聖人もいわれたように、女人は物に随って物を随えるという特性があるので、家庭の平和と人間の幸福とは、女性自身がこの天分をよく自覚して実行するか否かに切実な問題が係っているのだといえる。よき妻君を得た主人は出世するし、よき母を得た子供は立派に成長する。もし世の中に不良児の如きものがあれば、父親よりも母親の方に原因があるといわれている。悪業の因縁ということばが仏教にはあるが、カルマ(業)を背負うものは主として女親の方である。換言すれば、子供の性格的欠陥は母親から遺伝する率が高いということがいえるようである。直接的に生み出されたものと、それを産み出したものとの先天的関係が物をいうのであろうか。問題の親はあっても問題の子供はないと、ニールもいっているが、特に母親の責任は重大であるといわなければならない。

女性は家庭に入っても入らなくても、男性より常に清く正しくあらねばならぬし、比丘尼に課せられた五百戒も教団の御都合主義とは無関係に、それだけの必要性があったのかも知れないと思う。その意味で、人間完成を目標とする高等女子教育には極めて重要な意義があるべき筈である。その具体的方法として、道德教育がしばしば採り挙げられるが、本学園のように特定の宗派に所属した学校としては、倫理規定が宗教々育によって裏附を与えられることを要する。最後に宗教々育の問題の一端について論じてみることにしよう。

(6) 道德教育の支柱となるべき宗教々育について

宗教は具体的に、宗派・教派の個性ある信仰と切り離されて存在するものではない。しかし又、信仰自体にどのような個性的着色があろうとも、宗教心そのものは常に普遍的なもので、特定の信者が独占すべきものではない。宗教的心理の成長を情操的方面から考察して見ると、高等教育となつてから宗教情操教育を施行しようというのは、もう既に手遅れである。

揺籃時代からの宗教々育は重大なもので、別に論ずべきものだから茲には採り挙げないことにして、特色ある本学の場合を少しく考察して見るならば、本学園は日蓮聖人の信仰に立脚した法華経中心の教育を建学の精神としている。然るに戦後は、一宗一派に属した信仰は学校で取扱えない条項が出来ている。しかも信教の自由という憲法の保障を楯にして、如何なる信仰も強請すべきでないし、また強要さるべきではないとしてある。かくの如き制約を受けながらも、信仰は実際に個性的なものであることを考えるときに、学園に於ける宗教々育も理想的成果を挙げるためには、決して容易なわざではないことが知られる。

最近、よく道德教育が問題となるが、アメリカの占領政策から誤れるデモクラシーが普及し、伝統的な倫理観念が喪失された今日としては、当然すぎる反省の時期へ直面したともいえるだろう。しかし今、茲にいう宗教々育とは、更らに次元差を持った高度の教育理念だと思われる。

青少年子女に見られる道德意識の低下は、主として家族制度が破壊されたことに起因すると見てよいだろう。倫理観念の欠除は、具体的に

は両親への不知恩という貌で現われている。戦勝国の政策が影響を及ぼしたにしては、余りに犠牲が大き過ぎるという気がするが、直接的誘因が占領政策にあったにしても、宗教心を失わしめた唯物論思想がその背後にあることも忘れてはならぬ。現代人の教養は、すべて無神論的なものが根底になっている場合が多いようである。このような現代に有神論が復活して常識化したとしたら、世界の思想は根底から覆えて、病・貧・争の現代苦が見事に超剋されるであろうが、所詮、望んでも及ばぬユートピアに過ぎないともいえる。肉体の中に靈魂があり、しかも三世に常恒して、生命は永遠に不朽であると知っただけで、人類の倫理観念は一変するに違いないだろう。

顧みて茲に到れば、近代的常識を転換して小学校教育からやり直さなければいけない。十数年も積聚した常識を、高等教育だけで一変させることは不可能な事である。最終段階だけで思想の骨格を変えしめることは出来ない相談だといわずばなるまい。しかしながら教育は所詮、人格教育であることも事実だ。人格と人格との触れ合いによる感化が、子女の進路を大きく換えさせる可能性も考慮に入れてよい。

道徳教育の教育課程を作ることは、制約の多い宗教々育の場合に較べて、それ程むずかしくないであろう。宗教々育がその個性化を避けて普遍的な教科書を作ることにすると、恐らく前例もあるまいし、その可能性が極めて乏しくなる。何となれば、宗教知識を如何に導入しても情操教育にはならないからで、とって具体的な行事を媒介とすれば、宗教が個性化する惧れがある。

この場合に如何にすべきかという問題が当然次に提起されなければならぬが、茲で重要なこ

とは、宗教々育を抽象的に考え過ぎてはいけないということである。信仰の形式は学校で必ずしも教えなければならぬということはない。このような具体的問題は、必要に応じて各家庭で行われるべきことである。

学園には道徳教育というものが取り入れられている。この方面に宗教的内容が与えられたときに、今までの道徳教育が次元だけ高次のものとなり、そのまま宗教々育になるのではないかと思うが、これは理想論にしか過ぎないものであろうか。やはりこの問題も、人間完成を旨とす人格的陶冶という一課題を背負う限り、机上でプランを立てるよりも、その衝に当る教師が体当りで実践するところから、問題の解答が与えられるかも知れないのである。

それともう一つ注意せねばならぬことは、従来の仏教はその厭世観を一掃しなければいけないということである。

いかなる宗教でも発刺として常に新生命を創造していなければならない。何事にも捉われたが最後で、真の生命は涸渇してしまう。しかし異端は固より禁止されているし、どこまで教義の変更が許されるか、これは甚だ難しい問題といわなければならない。このところで思い起こすのは、いずれの宗派の元祖でもなければ末流でもないと言いつつ宗祖日蓮聖人のことばである。

今日の教養は複雑であって、経典と祖書のみによってその人の処世観が培われるということば、まずあり得ない。吸収した諸智識を総合して見れば、その分量に於いて宗祖を遙かに凌駕するかも知れないのだ。現代という時点に立つて、七百年前と相違した思想が生れて来たからとて、敢て不思議はないであろう。只、真理にどこまでも忠実であろうとした正直捨方便の法

華経精神は、如何に時代が変わろうとも忘れてはならないものである。

道徳教育の背景に宗教々育があるべきことを於ね論述したが最後に叙上の趣旨を要約して結論を提示して置きたい。

(7) 結 語

高等女子教育には、過去の経験から種々の具体策が用意されているでもあろう。抽象的に高度の理念を提示されることは、実際家である教師にとって困惑を感ずると同時に、また笑止の沙汰であるかも知れない。にも拘わらず叙上の考察を敢てした所以のものは、宗教的信条を建学の精神とする大学にも亦、何か一般の大学とは相違した指導理念の何物かがなければならぬという観点のもとに、その由来するところを系統的に明らかにしたいと思ったからに他ならない。もとより自意識を押しつける気持は更らないし、以上の論攻も自身の反省資料として叙べたものに過ぎないのである。

本論の要旨は、一般道徳教育に対して宗教情操教育を加味するという一事に尽きだが、注意すべき事柄としては日本民族の伝統的女性観とそれを仏教の立場で取り入れた日蓮聖人の婦人観を聚拠として、技術教育を媒介としつつも全人格的な教養を育成することでなければならないということである。

実際に即していえば、大学の卒業生は一般にすぐれた家庭の人であることが望ましいが、しかし理想的には、実用向の主婦を養成するだけであってはならないし、この要望に応えるものが、道徳教育を宗教々育との融合から生まれるものでなければならない。倅いに本学にはその当初から、既に述べた如き宗教的指導理念が与

えられているのである。教師がそれをどこまで自覚し、また実際にどのような貌で活用するかということが問題なのである。

今や全人格的教育によって日本人の魂を回復せしめ、宗教的高次の指導理念に基づいて高等教育の進路と運営に、慎重な用意がなされなければならない。次代の子女を育成する世の母親の使命に鑑みるならば、本学園の高等女子教育が極めて重要意義を持つものだということを認めざるを得ない。これを以て敢て自誠のことはとなす所以である。 (完)